

69

モンゴル時代の漢語イスラム医学書『回回薬方』と
中世イスラム医学書との関連についての一考察

—第30巻雑證門を中心に—

尾崎貴久子

防衛大学校総合教育学群外国語教育室

『回回薬方』（以下『回』と略す）、唯一現存するその稿本は、北京国立図書館所蔵の明抄本である。全36巻であったとされるが、下巻目次を含めて残存巻は4巻のみである。この書は編者も編纂年代も不明でありながらも、イスラム医学書翻訳書とされている理由は、記述内に、手書きのアラビア文字があり、薬品名やガレノスをはじめとする古代ギリシャおよび中世イスラム医学者の名前が漢語音訳されているためである。

残存4巻についていえば、第12巻 衆風門（しびれ・麻痺）、第30巻 雑證門（各種調合薬の処方レシピ集）第34巻 金瘡、折傷、棒瘡、針灸、治人齒所傷門（外傷治療とイスラム医学の灸治療）、そして下巻目次となっている。

この書はイスラム医学の東への伝播を示す唯一の証左として、その資料的価値は以前から研究者内で知られていたものの1990年代までその研究は皆無であった。また1990年代に出始めた研究のほとんどは、『回』の残存巻の内容に関しての医学者薬学者らによるもので、自ら専門的知識や臨床、データに基づき検討したものである。例えば、各種イスラム医学の調合薬の処方の特徴、薬材利用について中医学との違い、ウイグル医学との関連や影響、などに関するもので、『回』の内容の治療実践での有効性を検討したものであった。

その中で宋の研究は、イスラム医学との関連から『回』の歴史的資料価値を検討した唯一のものである。主著『回回薬方考釋』（2000年）においては漢語音訳の薬材や剤形、器具、身体部位名の解説がなされている。またイブン・スィーナーの『医学典範』との内容の類似や一致を指摘されている。しかしアラビア語医学書文献との詳細な一文一文の比較研究はなされていなかった。

本発表では第30巻の調合薬の処方レシピ集に焦点を当てる。この巻には230種余りの調合薬が所収されている。漢語音訳された薬材と漢語意識された薬材名の2種類の翻訳語を確認した。漢語音訳名とされた薬材類は、その多くは地中海沿岸地域や西アジア地域原産のもの（例えば、「咱法蘭」はアラビア語 *za'frān* の音訳サフランを指す）、で、モンゴルの興隆時代にイスラム医学の普及とともに中国に入った薬材として利用されていたと考えられる。一方、漢語意識名は、その物自体は漢語として訳して理解されるほど利用と普及は進んでいたものといえよう。例えば砂糖は「法尼的沙糖」とあり、これは、最高品質の精練された砂糖を意味するアラビア語 *fānīz* の音訳に意識語の「沙糖」が付された合成語となっている。またバラは「梅桂花」と表記された。これらが東アジアで利用可能になった背景には、文字による医学知識の伝播だけでなく、ユーラシア大陸の東西交易の活発化という背景も指摘することができる。

次に、第30巻内に確認できた医学者14名を検討する。その中には扎里奴西＝ガレノス（d.ca.210）や沙ト而撒哈里＝サーブール・ブン・サフル（d.869）や、阿不阿里撒納＝イブン・スィーナー（d.1037）の名がある。東へ伝播したイスラム医学とはどの時代のものであり、さらには中世イスラム医学の土台である古代ギリシャ医学の影響は『回』にあるのか否か、を検討する。

最後に処方レシピを一つとりあげ、一文一文の漢語とアラビア語原文がどのように翻訳されたかの具体的検証を行い翻訳の傾向を明らかにする。そのレシピは「撒福非阿刺思他黎西」を例に挙げ、『医学典範』所収のアラビア語の同一名「アレキサンダー大王のためにアリストテレスが書いた粉（服用）薬」の処方と一文一文比較を行う。明らかになるのは、複数のアラビア語医学書からの同一薬の調合を収集し比較し、最も効果あると判断したものを正確に記録するというという編者の翻訳の特質の一つを指摘することができる。